

## 高橋貴教授と愛知大学

河野 眞

Memories of Professor Takashi Takahashi and Aichi University

Shin Kono

### 国際コミュニケーション学部創設の頃

高橋貴さんが定年退職と聞いて、そんな時期になったのかと感慨を覚える。とは言え、昨年、筆者も定年で退職したので分かってはいたのだが、自分のことも併せて改めて来し方に思い返してしまう。氏との付き合いは公私にわたるが、算えるとちょうど20年である。つまり氏が愛知大学に新設された国際コミュニケーション学部の教員として赴任されたときからである。

国際コミュニケーション学部の設立の経緯の概略は筆者の定年退職にあたっての回想に記したが(「思い出すことなど」国際コミュニケーション学会『文明21』第38号[2017])、そこでは触れなかった細かいことが幾らもあった。実はかなり厄介だったのである。1998年に発足した国際コミュニケーション学部は教養部の廃止の代替という面があり、主にその人文系の教員が中心になった。豊橋校舎ということもあって文学部と重なるところが多く受験生に対して両学部の性格の違いを明瞭にすることが課題だった。

高橋さんは愛知県犬山市の名鉄が経営する野外民族博物館リトルワールドに創設の時からかかわり、世界各地の建物の移設などの実績があり、また文化人類学が専門であった。山形県月山山麓の古建築やインド・ケララ州の村などの家屋の移築には直接たずさわったと聞いている。モロッコやインドネシアにも詳しいが、特にかかわってきたフィールドは南インドで、その地域の染織や銅器づくりには厚い知見をもっている。その頃、愛知大学には日本民俗学

の専門家はいたが、文化人類学はいなかった。そこで国際コミュニケーション教育の一環にそれを取り入れることによって、文学部との違いを出そうとしたのである。他にも文学部との住み分けのためにさまざまな工夫をした。共通の素養として国際ビジネスの初級を導入したり、中国や韓国やタイでの学生の現地学習を取り入れたのもそうであった。

本質的なことではないが、厄介な問題の解決につながったこともあった。これも学内の軋轢の一部なのだが、国際コミュニケーション学部の新設には、反対する空気も強かった。教養部の代替ではその7.8年前からさまざまな案が提案されては消えていた。近隣の病院と看護師育成という案もあった。筆者は1994年から一年間ドイツで海外研修を行ったが、でかけるときにはその総合社会学部に配属になるだろうとの見通しを聞いていた。しかし帰国するとそれはすでに立ち消えで、代わって理系の学部が実現の運びになっていて狐につままれたような感じだった。しかもそれから一月ちょっとすると、その人間環境学部に対して評議会では取り止めが提案されるといふ慌ただしさだった。文部省への申請の直前だったとのことで、学内は騒然となった。具体的なことは分からないが、突きつめると経営上の見通しだったようである。それはできるだけ施設・設備に恒常的に経費を要する種類の学部や学科に手を出すのはリスクが大きいという判断だったらしい。

そうした経緯から学内の意見はずいぶん割れていた。もっとも、それは学内政治の次元のことで、学長・理事長や学部長・評議会委員が基本的な問題にあたり、筆者は所与の条件で具体的な課題に取り組

んだ。厄介なことの一つは、教育学の教員が、理系学部への支持者であったために新設学部の学生には教職課程を受けさせないと言い出した。教職課程の教員を一人採用するなら別だが、その場合にも人事には時間が必要で、一年先延ばしせよ、という注文がついた。それは実質的には計画の頓挫を図ったものだった。最後に博物館課程の相乗りでその問題が何とか解決できた。高橋さんに異文化理解の面から博物館課程を担当してもらうというのは、文学部との住み分けと、暗礁に乗り上げていた教職課程問題の打開という二つの課題がからんでいた。

この一事からも背景が複雑だったことが分かるが、またハードルを越えるのを助けてくれた同僚も少なくなかった。後に地域政策学部の設置にかかわることになった新井野洋一教授（当時は助教だったと思う）や渡辺和敏教授も好意的だった。新井野さんは当時も个性的で、また独自の構想をもっていた。案件によっては激論を交わしたこともあったが、弾力的に状況に対処できる人だった。また経済学部も全体としては理系学部推進の考えがつかよところだったが、当時は若手だった岩崎正弥教授にもお世話になった。

新学部棟をどこに建てるのかもハードルの一つになった。豊橋キャンパスのどの場所も、反撥する人たちが何か口を挟むことができるような状態で、学内に空いた土地がないという事態で新学部を挫折させるという戦術も仕掛けられた。それを切り抜けることができたのは、水泳部が使っていた場所をゆずってもらったからで、それは体育の山本茂紀教授の計らいだった。

## 民具陳列室

国際コミュニケーション学部は1998年4月に発足したが、教育の特色として、モノを通して異文化理解という方法を取り入れた。五号館の3階のちょっとしたスペースだが、そこで幾つも企画を手がけた。運営の責任者は高橋貴さんで、それに筆者も含めて数人が委員としてかかわった。最初の展示企画は「食の文化」で、世界各地の食器や喫茶具が比較できるように展示し、学部生にゼミやクラスご

とに見学してもらった。「アメリカのサブカルチャー」、「中国の生活文化」、「韓国生活」もそれに続いて手がけた。「灯り」をテーマにしたこともあり、かねてオイルランプを調べていた高橋さんが得意の分野だった。後には「扇の東西」として日本の扇子と西洋の扇を比較することも試みた。

そうした企画の一部は『民具陳列室ニュース』というカラーで8頁から12頁の冊子を発行した。資料をまとめた形で収蔵しているわけではないので、他から借りて展示したこともあったが、9号まで発行し、ささやかながらも活動を情報として発したことによって、各地の博物館とのつながりができた。9号で止まったのは、途中から大学が（これには理由があるが）極端な財務緊縮策をとることになり、その余波が末端にまで及んで予算が組まれなくなったのである。発行している頃には、オープンキャンパスの時に高校生に配って大学・学部の紹介に役立っていた。



民具陳列室（5号館3階）の展示風景 2004年



『民具陳列室ニュース』第6号 特集「ヨーロッパの扇」(2008年)

## 共同研究

筆者の手元に数点の著作と報告書がある。高橋さんと私が主に計画して他に数人の同僚とも一緒に大学の共同研究を3回行った。その直接の成果である。

『オイルランプとサモワール—生成と伝播をめぐる文化人類学的研究』愛知大学民具陳列室「研究報告」第1輯 2006年3月

『扇の文化』高橋貴(編著)あるむ 2011年

『ドイツ語圏に見る民藝と民俗』2014年3月

この他、先に挙げた『民具陳列室ニュース』にも、研究成果を活用した。特に第7号と第9号はヨーロッパでの調査旅行をもとにしている。

なお上に挙げた『ドイツ語圏に見る民藝と民俗』は平成21年度愛知大学研究助成(共同研究2009~2011年度:B35)を受けた「民衆工芸の理論と歴史に関する国際比較」の成果である。このテーマの下で行なったのは主に次の研究項目であり、当初の計画と大筋では一致している。研究の経緯を以下に記す。

この中で高橋さんは「ミュージアムから見るドイツの民俗」を執筆している。それに加えて筆者はちょうど一年前に『ドイツ民藝論』(創土社)という本を出した。これも共同研究が基礎になった。

報告書の段階でのことだが、そこには博物館の専門家らしい多くの知見が盛り込まれている。ドイツは地方の郷土博物館や資料館(ハイマート・ムゼウム)の活動が活発だが、それを担っているのは広く言えばヴォランティアの団体になっている。ドイツ語ではフェルアイン(Verein)と言う組合組織ないしはクラブである。独和辞典では社団法人の訳語を当てていることもあるが、それも不思議ではなく、登録団体に法人格の性格をもつ。大きなフェルアインとなるとメンバーが数万人にもなり、たとえばサッカーのチームなどスポーツの関係の事業の団体もフェルアインである。それはともかく、ミュージアムの運営におけるフェルアインの実態にふれているのは注目してよく、博物館にたずさわってきた人ならではの経験を踏まえている。

具体的な文物でも高橋さんが取り上げているなかには、日本人があまり気づかない種類が含まれる。たとえば昔の細工物の職人が作業台でつかっていたガラスの球がある。水を張ると大きなレンズの役割になり、また蠟燭が一つでも複数の水球がそれぞれ集光レンズとなるため数人が作業できるという工夫である。またナチス=ドイツ期の博物館についても高橋さんは調査をしており、これも具体例となると日本ではこれまであまり紹介されていないので新しい知見だと思う。



ドイツの昔の職人が手元への集光に使っていたガラス玉(水を入れてレンズとして機能させる:ヘッセン州シュヴァルムの郷土資料館のジオラマ)高橋貴「ミュージアムから見るドイツの民俗」より

## 調査旅行の思い出

高橋さんとは先に挙げた共同研究で何度かヨーロッパへ出かけた。その頃氏がテーマにしていた<扇>に関する場所が多かった。ロンドンやパリの扇博物館は私設だが、たいそう充実したものだった。今もそれを専門にする工房もあり、職人もいる。骨にこまかな切り込みの透かしを入れることが多く、その糸鋸の作業の現場を実際に見せてもらったこともある。どういふときには扇を使うかについても西洋には独特のものがあつた、そのために扇の仕様が変化していることもある。派手なところでは、フラメンコ・ダンスの小道具でもある。能楽のようにおもむろな動作ではなく、片手で勢いをつけて開くのでそれに耐えられるような造りになっている。そうした作業場一つがスペインのヴァレンシアにあつた。工房があることをどこで調べたのだろうと思うが、高橋さんは話しをつけていたらしかつた。ヴァレンシアの時はちょうどカーニバルの直前で、町のいたるところで張りぼての大きなフィギュアを作つていた。町内ごとに出し物を作り、カーニバルの当日には街を練り歩いてコンクールに臨み、最後はそれを焼いてしまう。それが祭りのフィナーレでヴァレンシアの火祭りとして知られている。日程上そこまでの滞在は無理だったが、祭りの進め方がある程度実見することになった。



ヴァレンシア郊外の扇職人の工房で、修復中の古い扇を前に聞き取り 2009年3月12日

調査旅行は大学の学期中は行けないので、どうしても夏か冬になるが、今のヴァレンシアもそうだが、冬の方が多く、また入試が終わった二月後半になる。そういう制約もあつたが、折角ならとカーニバルを組み込んだことが何度かあつた。

それには、愛知大学の非常勤講師の民具研究家、繁原幸子さんも一緒のことがあつた。そのうちの一つは、南西ドイツのロットヴァイルという田舎町だつた。ドナウ河の上流で、まだ大河にはなつていず、ちょうど豊川の奥三河あたりのような渓谷である。固い岩の急斜面で、町全体が斜面に築かれていた。人口約5000人の半数が仮装をして祭りの担い手になる。私たちが訪れた時には日本人は他に誰もいなかつた。

カーニバルの主役は<ナル(Narr)>と言う仮装者である。日本では道化師とも訳されるが、まともではない半端者といった意味である。そのため<阿呆>とも訳される。それが職能となると道化師なのである。ちなみに<阿呆の家>(Narrenhaus)という言い方もある。独和辞典には<精神病院>という訳語が載つていて、昔は留置場をも指していた。その阿呆が主役になるのが、カーニバルの古形にあたるファスナハットの基本である。阿呆の裁判と言つて、法廷のパロディが演じられたりするのである。

そういう古形に対して19世紀に一種の近代化が起きた。ケルンのカーニバルのような、同時代の風刺を大きなフィギュアに仕立ててパレードをするのはライン河流域の大都市での発展だつた。元になつたのはイタリアとフランスで、またやや特殊な形態をとつたのがヴェニスであつた。今でいうコスプレを軸に発展したのが、現代の感覚に合つたのだろう。独特の仮面が有名になり、それも併せて思い通りの装束をつけるために世界中から人があつまり、そのためカーニバルは約3週間も続く。普通は一日か二日のイベントなのである。



南西ドイツ、ロットヴァイルのファスナハット(カーニバル) 2011年3月8日  
住民の半数近くが仮面と仮装で暴れたり飴玉を配つたりする(飴玉の通称<阿呆の種>)

そこで期間の長いヴェニスと二日だけのロットヴァイルを組み合わせた。ヴェニス郊外のマルコポーロ空港からドイツのシュトゥットガルトへ飛んで、そこから列車で向かったのだが、途中でチュービンゲンに立ち寄った。その大学の民俗学の主任教授だったヘルマン・バウジンガーは世界的に知られている。民俗学という学問分野を根本から変えるような方法論で日常研究を切り開いたからである。筆者は一時期チュービンゲンに滞在して教えてもらったことがある。年齢からとうに引退しているが、90歳になってもなお著作を刊行し続けている。主要著作は西洋各国語に訳されているが、数年前には中国でも翻訳が出た。

バウジンガーのところに立ち寄ってあれこれ話をしたが、高橋さんとは気が合ったらしい。特に博物館のあり方では二人は活発に話をしていた。そしてそれが縁で、高橋さんは海外研修でチュービンゲン大学に半年間滞在することになった。



ヘルマン・バウジンガー教授、高橋貴教授、  
繁原幸子さん（民具研究家）  
チュービンゲン大学「ルートヴィヒ・ウーラント経  
験型文化研究所」にて 2011年3月9日

調査では、中部ドイツのヘッセン州の北辺、ヘルプシュタインという小さな町を訪ねたこともある。このときは高橋さんと繁原さん、それに私の三人だった。そこのファスナハトにはドイツ民俗学の分野で1970年頃に指標的な研究があり、一度見ておきたかったのである。日本を発つときに大雪で現地へ入る道路が通れるかどうかあやしいということだったが、

心配したほどではなく、汽車とバスを乗り継いで行き着いた。ついて見ると、やせた土地であることはすぐに分かった。ドイツでも特にアメリカへの移民を多く出した地域でもある。現在は機械化が進み農法の改良もなされた結果、中部ドイツの農業地帯の一角を構成している。またファスナハトは町の代表的なイベントで、常は他所で働いている人たちが、大学生生活をおくっていたりする若者たちが、その時ばかりはと帰ってくる。その地のファスナハトの起源には諸説があるが、独特の跳躍が伝統的なパフォーマンスになっている他、青年たちが女装をすることも知られている。ちなみに、カーニバル（ファスナハト）の仮装は男女の入れ替わりに原型があるという説を立てている研究者もいる。そこで行事を一通り見学したのだが、日本人が来ることはないらしく、市長さんとの会合が設けられ、そのため一泊延長することになった。このときは帰りにマールブルク大学のヨーロッパ・エスノロジー研究所へ立ち寄った。かねて筆者が交流している教授が所長なのである。

高橋さんにレンタカーを運転してもらって調査に歩いたこともあった。イギリスがそうだった。はじめての場所へゆくのだが、そう昔でもないのにナビゲーションはついていず、道路地図と道標を見ながらであった。そういうことには不慣れなので、曲がり角を通り過ぎてからそれに気づくようなことがあったりした。ロンドンからリーディングまで高速道路で、その後一般道路にでて、マールボローの郊外で宿をとった。そしてバスとその近郊の博物館や資料館を訪ねた。その帰途が天候不順で、道路事情が悪化し、あやうく飛行機に乗り損ねるところだったのを思い出す。

イギリスへ出かけたのは2回だったが、そのうちの一度は、現地で、共同研究者の塚本倫久教授と合流した。さすがに英語の達人で、そのときの成果は大きかった。博物館でも、かなり細かい聞き取りができたのである。それを研究に最も活かしたのは高橋さんだったろう。共同研究では現在の教学担当副学長、田本健一教授とも一緒に、田本さんは文献を活かした重厚な論文を書いてくれた。日本語学の山本雅子教授も共同研究の一員で特にフランスの文物への関心から知見を聞かせてくれた。これらを通じて互いの研究を幅のあるものにしていった。学部で

も大学院でも、そういう空気があり、それは今も生きていていると思う。

## 大学院国際コミュニケーション研究科

大学院についても触れておきたい。国際コミュニケーション学部在完成年度に合わせて大学院研究科を増設する運びになったが、これも一筋縄ではゆかなかった。他の研究科に併せればよいという意見があり、それ自体は必ずしも無茶なことではないが、そのモチベーションは不安を予想させた。学部の時に阻止しようとした動きに連なるところがあったのである。と共に、愛知大学には、本来あってもよいと思われる部門で大学院として受け皿のない分野が幾つもあった。それを見わたして、全学でそれを担当できる人たちを募ることになった。そうした経緯から、国際コミュニケーション研究科の担当者は幾つもの学部にもまたがっている。

2002年4月に発足し、院生の入学者は以後、毎年、10人前後であった。それが10年近く続いた。海外研修の機に研究科長を辞したが、しばらくすると高橋さんが研究科長として運営するようになった。ところがその頃から世のなかの様子が変わってきた。一研究科で何かできることではなく、少子化に加えて、国立大学の大学院の門戸が驚くほどゆるくなった。日本中で学生探しになりふり構わないという現在の様相へと移っていったのである。



大学院国際コミュニケーション研究科 修士論文の  
発表会 2012年1月28日

研究科長の頃には、大学院についても大学全体と

しても改革案を何度も提出したが、取り上げてもらえなかった。入学者の有無には関心がなく、教員の名誉のためだけの機関という病弊は今もつづいている。少し見渡すとヒントは幾らもあるのだが、見ようという姿勢が薄いのである。もっとも、そんなことを言っても、全体の落ち込みの一部なのだから責任の一半はあるとは思っている。

そんなことで高橋さんには苦勞をかけたと思う。何か提言してもたいてい取り上げられない私と行動を共にしてくれたことも多く、難しい局面を経験したと思う。またそういう組織運営とは別に、私の最後の院生2人のうち一人が修士課程の修了を延期したために、高橋さんに指導教授を引き継いでもらった。

## 学芸員課程

先の民具陳列室だが、大学の予算があまり組まれなくなってからも、その割には場所を活かして活動が続いている。予算の制約を逆手にとってであろうが、このところ高橋さんは学芸員課程では、学生の模型作りを中心に組み、そこに機織りと焼物の初級を組んでいる。模型では日本の有数のノウハウをもつ(株)愛知模型コンサルタントの亀井隆さんと日頃の付き合いもあり、若い世代へのその分野への関心を伝えたいと出向いてくれるのは有難い。博物館の事業運営の専門家、岡本靖生さん(株)丹青社コミュニケーション事業部プロデューサー)にも絶えず指導に加わってもらっている。機織りでは、あいち造形デザイン専門学校の染織家、間瀬友恵さんに出講してもらっている。



展示の実習にあたりテーマを練る課程履修者  
2009年5月23日



焼物の実習で土練り（菊練り）初級を経験  
2006年5月13日



間瀬友恵講師の指導で機織り実習  
2013年4月20日



展示の実習で課程履修者と共に 2005年5月6日



焼物の実習で課程履修者がつくった箸置きとぐい飲み  
2009年度



模型製作の発表会 2017年1月7日



模型完成まじか懇親会 2013年12月27日  
正面：亀井 隆社長 右から4人目：高橋教授  
右端：岡本靖生さん

高橋さんは、7年ほど前から「日本展示学会」の会長でもある。文化人類学者、梅棹忠夫が新しい分野として提案して育成してきた学会で、歴代の会長は錚々たる学究である。愛知大学では、地域政策学部の新設と共に、新井野教授など設置にかかわった同僚に誘われて同学部の創設にたずさわった。豊橋

校舎への愛着もあったのだろう。同学部が活力があるのは大学にとっては大きなプラスである。そしてこの三月に高橋貴教授は定年であるが、その活動の蓄積は今後も活かされるだろう。また文化人類学と博物館学の専門家としてまだまだ意欲的であるのは嬉しいことである。